

チアリーディング競技における クラブチームと学校運動部の関係性について —チーム志向や選手の価値観の違いに着目して—

生涯スポーツゼミナール 1213028 宇田川 まり

1. 研究動機・研究目的

以前、学校部活動に限られていたスポーツ活動の場は、近年、総合型地域スポーツクラブや民間スポーツクラブ等の出現により多様化している。これらの出現は、今までのスポーツのあり方や制度を変えただけではなく、私たちのスポーツに対する意識や価値観にも変化をもたらした。様々な環境や、価値観が存在するが、スポーツの価値は、そのスポーツを通して得られた心身の豊かさが選手にとって一生の財産となることである。様々なスポーツで、行う場が多様化した今、それぞれの場の選手の価値観を比較すると同時に、選手が長期にわたり競技を続け、スポーツを通し心身が豊かになる環境というのを考え直すべきであると本研究に取り組んだ。

先行研究をふまえたうえで、本研究では、特にチアリーディング競技に着目をする。クラブチームと学校部活動に関し、チームの方針や活動内容と、選手の価値観の違いを分析し、選手が長期にわたり競技を続けていくことが可能なチームの在り方を検討する。

2. 研究方法

・調査対象

本調査は、USA ナショナルズ 2016(チア&ダンス全国選手権)に出場した選手を対象とした。学校団体対象の School&college 部門から 2 チーム、それ以外の団体対象の Allstar 部門から 2 チームに調査を行った。また、長期にわたる競技活動について明らかにするため、大学生以上の選手にのみ調査を行った。

・実施手順

調査は質問紙法を用いて行った。調査票は、各チームの練習場に行き代表に渡す、もしくは郵送し、各チームの選手に配布を依頼した。回答後は、代表者が回収し、同時配布の返信封筒により返送するという方法をとった。

3. 主な結果と考察

“学校部活動”の根底の目的にあるのは、「競技としてのスポーツ」であり、競技においてより良いパフォーマンスをするためにある。関係性や、鍛錬志向、処理主義というのもその目的から形成されていると考えられる。

一方、“クラブチーム”の根底の目的にあるのは「楽しむためのスポーツ」である。競技や技術だけに重きをおいていない。また、選手は競技をやめるあまり考えていないため、長

	学校部活動	クラブチーム
目的	競技としてのスポーツ	楽しむためのスポーツ
性向	共同体主義	共同体主義
	勝利主義(強)	勝利主義(弱)
	鍛錬志向	伝統志向
関係性	競技:技術軸	競技:年功軸
	年功:上下関係	年功:水平関係
ライフスキル	感受性	自尊心
	親和性	リーダーシップ
		将来への計画性
		前向きな思考
区分	技術	経験・技術

期を見据えた考え方、関わり方
をしている。

“クラブチーム”と“学校部
活動”では選手の競技とのかか
わり合いに違いがあり、そこで
形成されるスポーツ観とライフ
スキルにも違いがあった。

4. 結論

今回、比較した結果の両者の特徴、長所から、選手が長期にわたり競技を続けられるチームについて考える。選手が長期にわたり競技を続けられるチームに必要な要因として、①どんな経験、技術にも対応したクラス。②選手とチーム間のコミュニケーションが十分にとれること。③スポンサーにより費用の負担を軽減できる。の3点を挙げる。

まず、年齢・技術を問わず、どんな選手にも対応できることが必要である。学校部活動で競技をしてきた選手や大会にでなくても競技を続けたい選手、社会人になっても仕事と両立をしたい選手など、どのような状況になってもチームや競技と関われると思える環境にすることで、進路選択もしやすくなる。また、このような選手の要求が満たされるために、選手とチームの間でコミュニケーションがとれるようにすることも重要であろう。選手の要求が満たされていないと競技を継続しようとする志向も低くなる。そして、“クラブチーム”の一番の課題であった費用の負担に関しては、スポンサーの協力により軽減することが可能である。大会で結果を残すだけでなく、地域のイベント等に積極的に参加することでチームのことも知ってもらえるだろう。

今回の結果から、“学校部活動”、“クラブチーム”問わず全てのチームの活動と競技を通し、選手は技術だけではなく様々なことを得られることが分かった。一見、将来性とは離れているように感じることに、その中でしか得られない達成感があるだろう。そんな中でどのチームにも必要なのは、現状を維持するだけでなく、もうひとつ将来を見据えたチーム作りであると考えた。

5. 卒業論文の執筆を終えて

本研究を行ったのには2つ動機があった。1つは今まで自分が“クラブチーム”に所属をする中で、多くの人に「いつ引退するのか」、「いつやめるのか」と聞かれたことに、引退を考えていなかった自分との間に価値観の違いを覚えたからである。2つ目は、来年度から社会人として今までのチームと関わる中で、これからも仕事と両立しながらも競技を続けていきたいと考え、そのためにはどのようなチームであれば良いか考えたからである。本研究を通し、同じように競技をする選手の考えを知り、今後の課題について考えることができた。自分が来年からも競技を続けることと、チーム作りをしていくことで今回の研究の結果を証明していきたい。